令和６年度

NARA ARTS BRIDGE for Youth

事業報告書

令和６年７月～令和６年11月

奈良市　文化振興課

目　次

NARA ARTS BRIDGE for Youth について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

国内プログラム
　事前ワークショップ、ガイダンス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　奈良市交流プログラム【日中韓青少年文化交流 in 奈良】・・・・・・・・・・　10

海外渡航プログラム
　韓国・済州特別自治道青少年交流プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・　14
　　参加者レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
　中国・寧波市青少年交流プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
　　参加者レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

活動の成果
　成果報告会（国内プログラム）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27

令和 6 年度　今後の課題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　29

ＮＡＲＡ　ＡＲＴＳ　ＢＲＩＤＧＥ　ｆｏｒ　Ｙｏｕｔｈについて

■　NARA ARTS BRIDGE for Youth

「NARA ARTS BRIDGE for Youth」は、2016 年の東アジア文化都市における日中韓交流事業の成果を未来へと繋いでいくための大学生や高校生等を対象とした国際文化交流プログラムである。

平成 29 年度から、奈良市内で様々な分野についての学びを深めるプログラムや、中韓からの大学生や高校生等を招き交流を行う日中韓青少年文化交流プログラム、さらに日本から現地に渡って学生たちと交流を行う海外渡航プログラムを実施している。

なお、これまで「東アジア文化創造 NARA クラス」として行っていた青少年国際交流プログラムを、昨年度より「NARA ARTS BRIDGE for Youth」としている。

■　令和 6 年度テーマ「アート」

今年度は「アート」をテーマに各プログラムを実施した。「アート」は国境を越えて人々を結びつけ、共通の感動や思いを共有する手段にもなる。そして人々をつなげ、文化的な架け橋となる力を持つ「アート」を通した活動が、東アジアのより豊かで平和な未来の構築につながると考え、本企画を行った。

東アジア文化都市 2016 奈良市

「東アジア文化都市 2016 奈良市」では、事業の柱となる「基幹事業」、中国・韓国のパートナー都市とともに開催する「交流事業」、奈良の既存のポテンシャルを生かしさまざまな事業と連携し発信する「連携事業」、そして、東アジアの文化をテーマとした「シンポジウム」で構成。

「交流事業」では、パートナー都市である、中国・寧波市、韓国・済州特別自治道とさまざまな分野において文化交流を行った。

参加者募集・選考について

募集期間：令和 6 年 5 月 1 日（水）～5 月 24 日（金）

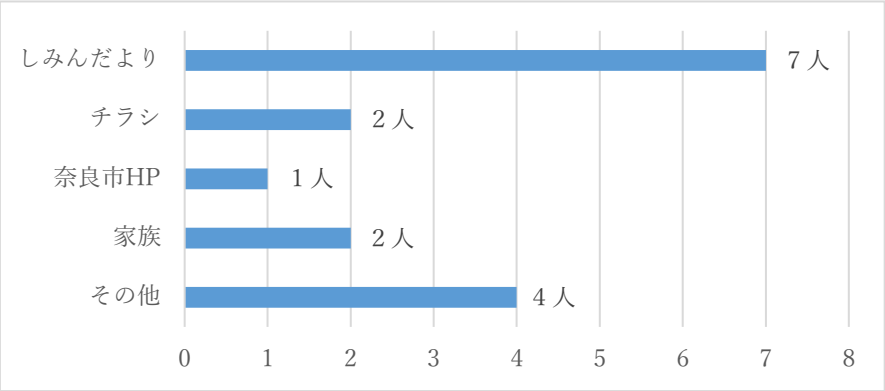
〇応募者　（人）

結果	高校生	大学生・大学院生	社会人	合計
選考通過	7	9	0	16
落選・辞退	2	3	1	6
合計	9	12	1	22

〇参加者　（人）

結果	高校生	大学生	大学院生	合計
寧波市青少年交流プログラム	3	5	0	8
済州特別自治道青少年交流プログラム	4	3	1	8
合計	7	8	1	16

プログラムを知ったきっかけ



国内プログラム

第１回国内プログラム　ガイダンス＆ワークショップ

日時：令和６年７月１３日（土）　１０：００～１４：３０
場所：奈良市中部公民館
出席者：NARA ARTS BRIDGE for Youth　１５人（１人欠席）
内容：
＜午前＞
　事務局よりプログラムについての詳しい説明を行った後、中韓パートナー都市や過去のプログラムの様子等も紹介した。
　次にアイスブレイクとして、自己紹介ゲームを行った。これは参加者全員が１列に並んで、自分の自己紹介の前に自己紹介をした全員の名前を 1 人ずつ言っていくゲームである。最後の人は全員の名前を覚えなければならず、必死に覚えようとする姿が印象的だった。また、最終的には緊張が解けた様子で、笑顔もたくさん見られた。
　その後、グループに分かれて事前に提供された話題の中から２～３件のテーマを選択し、それについて話し合いを行いながら、参加者同士のコミュニケーションを図った。
　話題の例：大学生活、出身地のおすすめのスポットや食べ物、最近面白いと思ったこと、休日の過ごし方、中国語か韓国語を勉強することになったきっかけ、自分の MBTI（個人の性格を理解するツール）、好きな音楽／スポーツ、自分の夢、犬派 or 猫派、USJ 派 or ディズニー派、田舎暮らし or 都会住まい等。

　奈良市交流プログラムでは、参加者が企画と準備を行う。参加者企画の１つ目は、交流１日目のホテルで行う親睦を深めるための「レクリエーション」である。参加者全員で検討した結果、３つのゲームをすることとなった。
　その後、３チームに分かれ、各チームがどのようゲームをするのかを話し合った。次回までの課題として、それぞれがどのようなことを行いたいか、どのようなものが必要なのかをシートにまとめることとなった。

＜午後＞
　参加者企画の２つ目は交流２日目の奈良公園周辺の「班行動」である。
　事務局より散策時間や集合場所、注意事項等を説明し、班分けをした。5 班に分かれて、各班がどのようなルートで散策するのかについて話し合いを行った。各班の人数は 5～６人で、次回までの課題として、ルートのテーマと内容を課題シートにまとめることとなった。
　その後、済州特別自治道青少年交流プログラム参加者に向けた説明会を行った。

【実施後アンケート】（一部抜粋）

・ 年代はバラバラでしたが、話し合ったり同じ目標に向かって思考することで、一体感が生まれたのでは無いかと思っています。普段関われないような方々と関わりが始まってとてもワクワクしました。

・ これからプログラムが始まることを自覚し、このメンバーで進められることにワクワクしました。アイディアをたくさん出して中国と韓国の方達と楽しめるプログラムにしたいです。

・ 初めて会う方ばかりなので、少し緊張していたが、アイスブレイクなどで他の参加者の方と話す機会を設けていただいたので、すぐに緊張がほぐれました。１回目から奈良での交流について話し合い、当日奈良の参加者と海外の参加者の皆さんに会えるのが楽しみになったし、有意義な体験となるよう準備したいと思いました。

・ 学内での交流は日常的にあっても、学外の同世代の方と交流する機会は少ないので、刺激的な体験をすることができました。

第２回国内プログラム　窓ガラスワークショップ

日時：令和６年７月２０日（土）　９：３０～１５：３０
場所：奈良市中部公民館、奈良市はぐくみセンター
講師：中島麦氏（美術家）
出席者：NARA ARTS BRIDGE for Youth　１５人（１人欠席）
内容：
「コチラとムコウ in はぐくみセンター」

～見ることから描くことへ～
眼下に広がる奈良の景色を、コチラ側の窓に描く。
普段何気なく見ている景色を、目と手で新たに捉え直してみる。
＜午前＞
　寧波市青少年交流プログラム参加者に向けた説明会を行った。
　その後、前回の続きとして奈良市交流プログラムについて話し合いを行った。

＜午後＞
　今年度の青少年国際交流プログラムにおける事前ワークショップや、奈良市交流プログラムの指導等を担当する中島麦氏（以下中島氏と表記する）から自己紹介をしていただいた後、窓ガラスを使ったワークショップの説明を受けた。
　次に、参加者たちが中島氏の指導を受けながら、鉛筆で紙に線を描く練習をした。
　その後、参加者全員が奈良市はぐくみセンターへ移動し、窓ガラスワークショップを行った。
　これは、はぐくみセンター９階にある景色の良い窓を使い、消去可能なマーカーでムコウ側に見える風景をコチラ側の窓に描くことで、普段何気なく見ている景色を新たに捉えなおすためのワークショップである。
　最後に、フィードバックを行い参加者が感想を発表した。

【実施後アンケート】（一部抜粋）
・　窓ガラスにアート作品をするという初めての経験でした。普段見ている景色なのに、何故こんなにも手で描くことは難しいのだろうかと思いながら集中して取り組みました。見る角度によって違う景色があり、線の描き方でそれぞれの味が出ることを学びました。中島さんもおっしゃっていたように、今は写真ですぐに景色を撮ることで形にできるけれど、自分の手で景色を時間をかけて見ることで様々なことを考えるそんな時間の大切さを実感しました。

・ 窓ガラスワークショップと聞いていて、何をするのかわからなかったが、窓ガラスの向こうの景色を描いて、完成したときにとても感動しました。普段絵を描いたりするのが興味でなければ、アートと触れ合う機会は少ないと思っていたけれど、実際に生活の中の普段の景色も一瞬でアート作品になるのだと感じました。

・ 中島さんのお話は、とても興味深かったです。ワークショップでは、社会を違う角度から捉えるきっかけを得られたように思います。非常に意義深い時間でした。

第３回国内プログラム　奈良墨ワークショップ

日時：令和６年８月８日（木）　１３：００～１５：３０
場所：奈良市杉岡華邨書道美術館
講師：中島麦氏（美術家）、長野睦氏（奈良墨工房「錦光園」）
出席者：NARA ARTS BRIDGE for Youth　１５人（１人欠席）
内容：
「五感で感じるモノクロの世界～墨に五彩あり～」
～描くこと、創ることは五感で感じ、自己を解放すること～
奈良の伝統工芸品「奈良墨」について学び、全身で体感するワークショップ。
墨を飛ばし、思い切り自由に表現することで心も体も解き放つ。
薄い色から濃い色へ、濃度を変えながら、モノクロームの世界で自分だけの色を見つけ出す。

＜午前＞
　会場である奈良市杉岡華邨書道美術館の展示室の準備を行った。

＜午後＞
　「五感で感じるモノクロの世界～墨に五彩あり～」をテーマとしたワークショップを開始した。
　講師として錦光園の長野睦氏を迎え、奈良墨の現状や作り方等について説明をしていただいた後に、参加者たちが実際に墨を擦って、自由に好きな言葉等を半紙に書いた。
　その後、薄い色から濃い色までの墨を使い、大きな和紙に墨を飛ばして描くワークショップを行った。
　全身を使い墨まみれになって描くことで、視覚だけでなく、香りや触感、音等、五感を使いながら、モノクロームの世界に多様な色があることを知ることができた。
　また、参加者たちが持ってきた白い T シャツにも自由に墨で描き合い、真っ黒になった参加者の姿もあった。

【実施後アンケート】（一部抜粋）

・ 中学生の頃に使ったきり、一度も使っていなかった墨や筆を使うことは、貴重な経験で、楽しくプログラムを終えることができました。最初は真っ白な T シャツに墨をかけることは抵抗がありましたが、最後は夢中になって墨にまみれることができました。今回のプログラムでアートの無限の表現と楽しさを実感できました。

・ 小学生の時は、書道は難しいものだと思っていたけれど、この体験をしてから考えが変わり、芸術として凄く面白く奥が深いのだなと感じました。色の濃淡で奥行きが出たりするのが特に印象に残っていて楽しかったです。薄い色～濃い色へと色が変化するとガラッと雰囲気がかわって黒一色なはずなのに鮮やかに見えました。

・ プログラムが終わってから、みんなで T シャツを見ると想像以上に芸術的になっていたり、文字や絵が描かれていたりと一人一人の個性を見ることができました。そのおかげでまたみんなとの仲が深まったと思います。

・ 小学生ぶりに、墨、書道に触れることができ、新鮮な気持ちでプログラムに参加していました。また、墨を全身に浴びるという、非日常を味わうことができて、とても楽しかったです。

・ 墨という存在について、日常生活においてあまり考えたことがなかったのですが、ほとんどの墨が奈良で作られていて、職人業の苦労を知って、そういった職業への意識が変わった良い機会を得ることができたと思っています。

第４回国内プログラム　色探し・色づくりワークショップ

日時：令和６年９月１４日（土）　１０：００～１６：００

場所：奈良市中部公民館

講師：中島麦氏（美術家）

出席者：NARA ARTS BRIDGE for Youth　１５人（１人欠席）

内容：

「奈良の色を探して、見つけて、創る」

見ること。感じること。表現すること。は「ART」の基本。

「色」を探すという視点でフィールドワークすることで、普段は気づかないモノを発見する。

身近な場所が多様な色彩に溢れていることを知るワークショップ。

＜午前＞

ならまち周辺で色探しワークショップを行った。これは参加者が持っているスマホで風景等を撮影しながら「色」を探し、たくさんの色を見つけるものである。

「色」を探すという視点でフィールドワークすることで、普段は気づかないモノをそれぞれが発見することができ、身近な場所が多様な色彩に溢れていることを知った。

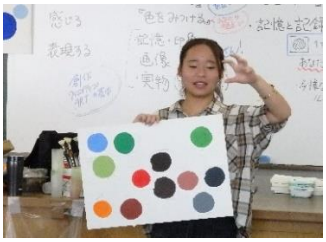
＜午後＞

午前中のフィールドワークでの印象や撮影した写真、持ち帰った物を参考に、絵具等を使って色を再現する色づくりワークショップを行った。

色を作るというシンプルな作業で、各々の視点の違いにも気づくことができ、参加者が見つけた色に新しい名前をつけ、たくさんの色を作ることができた。

最後に、フィードバックとして、参加者が出来上がった作品について発表を行った。

ワークショップ終了後、奈良市交流プログラムの準備を行った。歓迎セレモニー、レクリエーション、班行動のルート内容等について話し合い最終確認を行った。



【実施後アンケート】（一部抜粋）

・ 普段なかなか意識して奈良の街並みをじっくりと見る機会はなかったが、今回のワークショップを通じて色を探すうちに、奈良の古い街並みやレトロな銭湯など新しい奈良の魅力を発見できた。猿沢池の色のようにあまり作ったことのない色を表現するのは難しかったが、久しぶりに絵具と向き合い色を作っていくことが面白かった。

・ 筆と絵の具を使って色をつくるのは久しぶりで、どの色を組み合わせたらどの色をつくれるのかというのも忘れかけていた。今回実際にならまちを歩いて色探しを行うことで、普段歩いていたならまちとは違ったならまちを感じることができた。同じ色として捉えていた色もしっかり見ると色にも違いがあり、それぞれの色がならまちの雰囲気をつくりあげる役割を担っているのだと感じた。絵の具を使って自分が発見した色を再現しようとしてみても、まったく同じ色を作り出すのは難しく、私たちが生活している中で色はたくさんあるけれど、色は想像しているよりもはるかに種類が多いのだと思った。同じ道を歩いてきた参加者でも、選んだ色や色の明るさや濃さが違って、見る人によって感じ方が違うが面白かった。

・ まず、ならまちを色に注目して歩く経験はなかったので、新鮮な気分でならまち散策ができたと思います。ならまちは茶色や黒などの色が多く、それらの色にも微細な違いがあって面白いなと思いました。また、絵具を最後に扱ったのは 5 年以上前なので、久しぶりに絵具を混ぜて塗るワークをしてみると、中学生や高校生に戻ったような気持ちになれました。意外と色を混ぜ合わせて特定の色を作るのが難しく、やきもきしましたが、自分なりに満足できる色を作れました。色に自由に名前をつけるのも各々のセンスが表れて面白いなと思いました。

奈良市交流プログラム【日中韓青少年文化交流 in 奈良】

日時：令和６年９月２８日（土)、２９日（日）
場所：奈良市役所、奈良公園、ならまち、奈良大学、奈良ユースホステル、西大寺
講師：中島麦氏（美術家）
出席者：奈良市　　参加者　１５人（１人欠席)、指導者１人　合計１６人
　　寧波市　　参加者　８人、引率者・通訳２人　合計１０人
　　済州特別自治道　参加者　１０人
内容：日中韓参加者による国際文化交流プログラム

交流１日目／９月２８日（土）

＜午前＞

歓迎セレモニー（進行は英語、説明等はボランティア通訳あり）

奈良市役所の正面玄関にて、寧波市と済州特別自治道の参加者１８名を大きな拍手で迎え、セレモニー会場へ誘導した。

セレモニーでは奈良市参加者が英語で司会進行を行い、最初に奈良市文化振興課長の森光子氏からの日中韓の参加者に向けて挨拶と、各都市の参加者の紹介を行った。

続いて、奈良市交流プログラムで指導等をしていただく中島氏の紹介の後、午後に行う奈良大学でのワークショップについて説明を行った。

歓迎セレモニー終了後、アイスブレイクとして親睦を深めるためのレクリエーションを行った。

行ったゲームは「お絵かきクイズゲーム」で、一番目の人はテーマを確認し、30 秒でその内容をスケッチブックに絵で描き、描き終わったら次の人に自分の絵を見せる。さらに次の人はそれを見ててテーマを推測し、新しい絵を描く。同じ動作を順番に繰り返し、一番最後の人が絵の内容を見てテーマを当てることができればチャレンジ成功である。

ゲームを通じて、参加者の緊張もほぐれ、笑顔がたくさん溢れていた。

＜午後＞

窓ガラスワークショップ（奈良大学）

昼食後、奈良大学へ移動した。

会議室で説明を行い、その後ワークショップを行う展望デッキへ移動し、5 班に分かれ大きな窓ガラスに絵を描いた。

国籍や年齢関係なく、同じ景色を見ながら同じ窓に向かって絵を描くことで、それぞれの視点の違い、また共通する感覚を認識することができた。

グループワークショップ（ならまちエリア）

「コチラとムコウ in ならまち」

～一緒に創ることで共感と差異を発見する～

奈良大学の展望スペースで、日中韓 3 か国の参加者が絵を描きながら互いの視点を共有。

後半では、持ち運べる小窓を手に周辺を散策し、各自がどこを切り取り（フレーミング）表現するかを探求する。

場所が決まったら、各自の視点で景色を描き、それぞれの視点の違いを楽しむ。

後半は、各班が"小窓"（写真参照）を持ちながら、ならまち周辺を散策し、各自の視点で小窓に景色を描くワークショップを行った。

奈良の歴史ある街並みを中国と韓国の参加者に楽しんでもらいながら、参加者がオリジナル作品を制作した。

その後、奈良市役所へ移動し、南庭広場で中島氏が参加者の作品から何点かを選び、参加者が感想を発表し合った。

歓迎夕食会

ノボテル奈良で歓迎夕食会を行った。冒頭に奈良市文化振興課長の森光子氏より挨拶の後、夕食会を開始した。

レクリエーション

夕食後、日中韓参加者は奈良ユースホステルへ移動し、3つのゲームのレクリエーションを行った。司会・進行はそれぞれのチームの奈良市参加者で、ボランティアが中国語と韓国語の通訳を行った。

具体的にはお菓子交換ゲーム、爆弾ゲーム、30秒ゲームをして1日目を終えた。

交流２日目／１１月１９日（日）

＜午前＞

班行動

朝食後、奈良公園へ移動した。その後、チームごとで事前に決めたルートで奈良公園周辺を3時間程自由に散策した。最後になら和み館に集合して昼食の時間とした。

＜午後＞

文化体験

西大寺の佐伯俊源氏より大茶盛について説明をいただいた後、日中韓参加者が特大の茶碗でお茶を味わう大茶盛式を体験した。

その後、グループで西大寺境内を拝観した。

フィナーレ

西大寺から奈良市役所へ移動し、フィナーレを行った。

最初に、奈良市文化振興課長補佐の吉川友子氏と寧波市文化広電旅游局書記の林雪蕾（リンセキライ）氏、済州特別自治道文化政策課チーム長のパクチュンホ氏から挨拶があり、2日間の交流記録動画を観賞した。その後、各都市参加者代表の感想発表を行った。

最後に奈良市から中国と韓国の参加者に記念品を贈り、全てのプログラムが終了した。

参加者は別れを惜しむように、参加者同士でプレゼントの交換や写真撮影をしたり、抱き合ったりしていた。

海外渡航プログラム

韓国・済州特別自治道青少年交流プログラム

日　程：令和６年７月２９日（月）～８月１日（木）

出席者：奈良市参加者８人（引率１人、通訳１人）　合計１０人

寧波市参加者 10 人（引率２人、通訳１人）　合計１３人

済州特別自治道参加者２０人（講師等５人）　合計２５名

東京学芸大学参加者５人

１日目／７月２９日（月）

13 時頃に関西国際空港を出発し、15 時頃済州国際空港へ到着した。

空港にて済州特別自治道文化政策課のハンソンウ氏、日本語通訳のシムボギョン氏、前日入りの東京学芸大学学生５名（済州特別自治道の招待者）による出迎えを受け、バスで空港を出発した。途中で寧波市参加者と合流し、ホテルへ向かった。

ホテルの部屋割りは、中国参加者と奈良参加者、韓国参加者と奈良参加者の同室（2 名 1 室）であった。

17 時からオリエンテーション・プログラムの説明と夕食会が済州青少年センターで行われた。主催者である済州特別自治道文化体育対外協力局事務局長のオソンユル氏からの挨拶の後、プログラム説明と各都市参加者の紹介が行われた。

夕食後、4 チームに分かれ済州特別自治道青少年交流プログラムコーディネーターのチェユラ氏の指導によるグループワークを行い、グループの中で自由に 2 人組を作って似顔絵を描いた。

２日目／７月３０日（火）

朝食後、9 時にホテルを出発し、済州海女博物館へ移動し、ガイドの説明を聞きながら、

博物館を見学した。

その後、海女文化を知るためのシンポジウムが行われ、海女歴 55 年（70 代）の海女さんと 40 代の現役海女さんから貴重なお話を伺った。また、質問応答の時間もあったため、海女文化への理解を深めることができた。

昼食後、ダイビング体験についての説明や安全についての説明が行われた。

午後は海水浴場へ移動し、指導員の指導を受けながらダイビングを体験した。海に入っていない参加者は海岸で絵を描いていた。

夕食後は翌日の報告会に向け、各チームがそれぞれ活動して動画を作成した。

３日目／７月３１日（水）

朝食後、8 時半頃にホテルを出発して、海辺へ移動した。

事前説明を受けた後、プロギング（ジョギングしながらごみ拾いをすること）を体験した。

午後のワークショップに使う素材を準備するため、海岸のゴミの回収を行った。

昼食後、済州市民センターへ移動し、海岸で拾ったゴミ等を再利用してアート作品を作るワークショップに参加した。日本語通訳のシムボギョン氏は奈良市交流団の活動状況を確認しながら、参加者へ話しかけたり、必要なサポートを行った。

また、ワークショップが始まる前に、海女の古いウェットスーツでアート作品を作る作家による講演があった。

このワークショップを通じて、環境問題やごみ減量の重要性を学ぶことができた。

16 時半から、フィナーレを行った。

フィナーレでは、済州特別自治道政務副知事のキムエスク氏からの挨拶に続き、在済州日本国総領事館総領事の武田克利氏、在済州中国総領事館総領事の王魯新（オウロシン）氏、奈良市文化振興課振興係長の奥村宜幸氏、寧波市文化広電旅游局対外交流課の宋天一（ソウテンイチ）氏の挨拶があった。

終了後、チームごとで作成した動画の発表を行った。各チームの代表者から感想発表もあった。

夕食後、会場では各都市参加者代表、そして各チームの指導先生から感想発表を行った。奈良市参加者代表が 3 日間の感想及び感謝の意を発表した。

最後は済州特別自治道事務局から日本と中国の参加者全員にプレゼントが贈られた。

４日目／８月１日（木）

午前中は、国立済州博物館を見学した。

昼食後に空港に向かった。18 時頃関西国際空港に到着し、解散した。

【参加者レポート】（一部抜粋）

■ Ｔさん（高校生）

私は、済州渡航プログラムを通して、様々な学びを得ました。済州島にいた 3 泊 4 日の間は時間が過ぎるのがとても早く、中国の友人や韓国の友人と別れるのがとても名残惜しく感じるほど、楽しい時間が過ごせました。

そんな済州渡航を今振り返ってみると、たくさんの学びがあり、自分自身に大きな影響を与えてくれた時間だったと思います。

まず私は、韓国語や中国語は全く話せませんし、英語もカタコトで言葉が通じるのかという不安がとても大きく、実際に翻訳機なしではなかなか説明を理解したり話を理解するのは難しかったです。しかし、言葉が通じ合わなくても、笑顔だったりアイコンタクトだったり英語を用いたりして、お互い必死にコミュニケーションを測ろうと思えば少しは通じたり、通じなくても笑い会えたりして、言葉だけがコミュニケーションの全てではないということを学ぶことが出来ました。また、笑顔や相槌、ジェスチャー、相手の話を聞こうとする姿勢は、言葉が通じるもの同士でもとても重要な役割をしてくれると、改めて実感しました。

次に、私が得たものは今を大切にする心です。日本に住んでいる友人しかいなかった私にとって、「今ここで話しておかないといつ会えるか分からない」という危機に晒されたことはありませんでした。でも、韓国や中国の友人ができ、相手を知っていく過程で、別れが来てしまい、日本で会えない友人などがいることを知り、今、一緒に過ごすことの出来るこの時間を大切に過ごそうと思いました。そこで、時間は有限であり、永遠に一緒に過ごすことが出来ないのは、出会った人、全員に言えることだと思い、今の日本の友人や出会った人、一人一人と過ごす時間を大切にしようという意識を得ることが出来ました。

最後に、この済州渡航を通して、たくさんの思い出が出来ました。言葉が全く通じなかったり、初めて出会う人がほとんどだったり、食べたことの無い料理を食べたり、知らない土地を散歩したり、未知の体験を沢山することが出来ました。この体験は、新たな友人ができ楽しかった思い出であり、未知への好奇心をくすぐられた思い出であり、文化の違いを知ることが出来た思い出となりました。多くのことが経験でき、済州渡航プログラムに勇気をだして参加してとても良かったと思いました。

■　Ｎさん（高校生）

私は今回韓国に渡航してたくさんのこと経験することができました。韓国への渡航が決まった時は、このプログラムには日中韓の 3 か国の人が集まって文化交流を行う中で、コミュニケーションの問題や文化の違いなど不安に思ってしまう要素が多く、特に言語が一番の課題でした。私は韓国語が少し話せますが、中国の方とはどうコミュニケーションをとればいいのだろう、翻訳機がうまくいかず誤解を生んだらどうしようなどたくさん悩みました。でも今回のテーマがアートで、私自身絵が上手なわけではないですが、言語が違ってもアートを通してコミュニケーションをとってみようという風に考え渡航しました。

現地についてみると韓国の方々がとても温かく迎え入れて下さり、本当に嬉しかったです。少し人見知りの私にも優しく声をかけて下さって、渡航前に持っていた不安がすぐになくなりました。

１目のワークショップでコミュニケーションをとりながらお互いの似顔絵を描いたり、ご飯を食べたりするのがとても楽しかったです。自分の手先を見ずに絵を描くとこんなにも難しいのだなと驚きました。まっすぐ書いているつもりの線がまっすぐ書けず、いかに自分が絵や文字を書くとき目で確認しながら書いているのかを実感しました。でも目線を書いている対象に集中することで、いつも描く絵よりパーツの形がよりリアルに描けたような気がしました。

2 日目の海女についてのワークショップでは、現在の海女の状況や昔と今の違いなど詳しくお話を聞くことができてよかったです。日本の海女との違いや、海女同士の交流など普段生活していると知ることのできない内容ばかりで本当に面白かったですし、これから日本の海女についても詳しく調べてみたいと思いました。ダイビングの時間は 1 日目の時には話せなかった友達とたくさん会話をしながらコミュニケーションを取ったり、ダイビングの先生に詳しく話を聞きました。ダイビングはただ息を止めるだけだと思っていたのですが、海の中での泳ぎ方や深く潜るための工夫がたくさんあって驚きました。

３日目のごみで作るアートでは、聞いたことはあったのですがやったことはなく、普段ごみとして扱っているものでも視点を変えることで新たな発見や使い道を見いだせる点にすごく魅力を感じました。制作発表会は各グループの個性が出ていてすごく面白かったです。

今回の渡航で経験できたことは普段生活していて経験できるものではないので、本当に参加してよかったと感じています。渡航するにあたって提出した作文に書いた「アートを通して言語や文化の違いを超えたい」「自分の中で視野を広げたい」ということが 4 日間で達成できたのではないかと思います。言語や文化の違いに妨げられて 4 日間じゃ何もできないのではという考えが変わり、私自身の成長に大きくつながったなと思います。プロジェクト関係者の方々に深く感謝したいです。

■ O さん（大学生）

アートは、自身の探求の結果として生まれるものであり、個々の感情や思考を表現する手段です。同様に、国際交流も異なる文化や価値観を理解し、自身を新たな視点から見つめ直す過程です。このような交流を通じて得られる新たな発見や感動は、まさにアートのプロセスに似ています。

私が最も印象に残った国際交流の経験は、韓国や中国の友人との出会いでした。私は英語と日本語を話しますが、韓国語や中国語はできません。それでも友人が翻訳アプリを使って一生懸命コミュニケーションを取ろうとする姿勢に感動しました。この姿勢が言語の壁を乗り越え、心のつながりを感じさせてくれました。コミュニケーションを取ろうとする意欲こそが、真の理解と友情を築く鍵であることを実感しました。

異なる文化と接することで、日本の音楽や漫画、アニメが韓国で非常に人気があることを再発見しました。また、日本語を学びたいという韓国の友人たちと会話をする中で、簡単な日本語の挨拶を教える楽しさを経験しました。これにより、自国の文化に対する新たな視点と、異文化に対する理解が深まりました。

国際交流をアートと見なす際、最も重要な要素は「自己理解」「他者理解」、そして「多様性理解」です。これらの要素が、互いの違いを尊重し、共通点を見つけ出すために不可欠です。国際交流を通じて得られる経験は、自己理解を深め、他者に対する寛容さや共感を育むものです。それらの理解を助けるものが、コミュニケーションです。

コミュニケーションは言葉だけでなく、行動や贈り物を通じても示すことができます。多くの韓国の友人からお菓子やプリクラをもらった経験は、とても嬉しく、言葉を超えた心のつながりを強く感じました。これらの経験は、友情を深めるための大切な要素です。韓国の友人とは今でも連絡を取り続け、ビデオ通話をする予定です。もっと韓国語を学び、友人のことを深く理解したいと思っています。

国際交流は、言語や文化の違いを越えて人々を結びつける重要な手段であり、まるでアートのようです。自己理解と他者理解、多様性理解を深めることで、豊かな交流が可能になります。私の経験を通じて得た教訓は、今後の国際交流にも大いに役立つでしょう。また、この経験を通じて、言語をもっと学びたいという意欲が生まれました。英語だけでなく多言語を操れる人になり、言語の壁を越えて様々な人と心を通わせたいと感じています。

9 月に奈良での日中韓交流を予定しており、奈良の魅力をしっかり伝えたいと考えています。奈良県の魅力を感じてもらい、来てよかったなと思ってもらえるように努めたいです。済州島で感じた恩を日本で返したいと考えています。奈良の美しい風景や歴史的な建造物、そして温かい人々との交流を通じて、訪れる人々に素晴らしい思い出を作ってもらいたいです。

中国・寧波市青少年交流プログラム

日　程：令和６年８月２２日（木）～２５日（日）

出席者：奈良市参加者８人（引率１人、通訳１人）　合計１０人

寧波市参加者１０人（講師１人）　　合計１１人

済州特別自治道参加者１０人（引率２人、通訳２人）　合計１４名

１日目／８月２２日（木）

15 時半頃に関西国際空港を出発し、現地時間 17 時頃寧波国際空港に到着した。空港では寧波市事務局の陸佳瑜（リクカユ）氏、日本語通訳の兪卓（ユタク）氏による迎えを受けた。バスで移動し、18 時半頃にホテルの寧波南苑飯店に到着した。課題のテストが入ったオリジナルバッグが配布された。

その後、歓迎夕食事会が行われた。同主催者である寧波市文化旅游研究院長の戚迎春（セキゲイシュウ）氏から歓迎挨拶があった。

夕食会終了後、バスで天一閣博物院へ移動し、アイスブレイクを行った。

主な内容は切り分けた写真を１人に１枚ずつ配り、同じ組み合せの写真を持つもの同士がグループとなり、グループ内で参加者が手に絵具を付けてお互いの T シャツに手形を押した。

アイスブレイク終了後、各都市参加者が感想発表を行った。

２日目／８月２３日（金）

ホテルロビー集合後、バスで月湖公園へ移動した。

午前中は、月湖公園と天一閣博物院を見学した。

月湖は、唐代に開拓され、636 年に完成した湖。南宋紹興年間に、月湖の周りに四季折々の花や樹木が植えられ、「月湖十洲」（景勝地）が造られた。また、宋元代以降、明州（寧波）が輩出した文人や学者等知識人の多くが月湖周辺に集まり、「浙東学術センター」と呼ばれるようになった。月湖公園には、水則碑という水位を測るための施設がある。これは寧波を

水害から守るため、重要な役割を果たしていたものである。

天一閣は中国の明代の学者である范欽（ハンキン）氏が建てた書庫で、現存する中国最古の書庫である。范欽は読書家で、地方誌や行政書、科挙の記録、詩文集等を所蔵していた。現在も書庫とともに当時の蔵書が保存されている。その管理は厳重を極め、建物は池をめぐらして火災に備えていた。

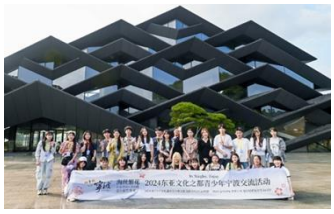
見学途中、奈良市参加者が寧波市広報のインタビューを受けた。

見学後、拓本体験を行った。文様や文字等が描かれている板を水でぬらして墨をつける。板に紙をのせて、文様がきれいに浮き出すようにブラシでこすりつけ、紙をはがして模様を写しとるという体験であった。

14 時頃から中国最大のアパレル企業である『YOUNGOR ヤンガー』の工場を見学した。

15 時半頃に東銭湖へ移動した。展覧会は開催していないため、韓嶺美術館の前で記念撮影のみを行った。東銭湖の畔に立っている韓嶺美術館は日本の建築家・隈研吾が設計したミュージアムである。

夕食をとった後、ホテルに移動し 2 日目を終えた。



3日目／8月24日（土）

8時半にホテルから出発し、寧波博物館を見学した後、午後の成果報告会に向けてワークショップを行った。

寧波博物館は2008年にオープンした博物館である。建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞を中国人として初めて受賞した王澍（オウジュ）氏の設計による斬新な博物館の建物が目を引く。博物館の展示スペースは8000㎡に及び、常設展では7000年前から現代に至るまでの寧波の歴史や伝統・文化を紹介する様々な展示品を見ることができる。中には、遣唐使といった日本との関わりについての展示もあり、古くからの日本と寧波の関係について知ることもできる。

施設内には三都市の参加者たちが撮った写真や都市紹介の展示があった。

午後の成果発表会に向けて行ったワークショップでは、グループごとで衣装作品を制作した。その後、伝統衣装を着ている奈良、済州の参加者は個別写真撮影を行った。

昼食後、寧波博物館1階のホールで成果発表会及び閉会式を行った。

プログラム内容は以下の通りである。

①文化公演「銅鏡舞」

②中日韓各都市代表者によるあいさつ
③奈良市による紹介（墨 WS で着た T シャツ）
④伝統演劇「越劇 追魚・観灯」
⑤文化公演　バンド「I Believe」
⑥中日韓三国伝統衣装ファッションショー
⑦文化公演　バンド「夜来香」
⑧共同制作作品ファッションショー
⑨文化公演　バンド「直到世界尽頭」
⑩各都市参加者代表による感想発表
⑪修了証書の授与式

奈良市による紹介では、奈良市参加者が国内プログラムで実施した奈良墨ワークショップで作成した T シャツを紹介した。中日韓三国伝統衣装ファッションショーでは、三都市の参加者が伝統衣装を着て舞台に上がり、それぞれの国の衣装を紹介した。

最後にプログラムの修了証書の授与式があり、奈良市参加者 2 人が寧波日報のインタビューを受けた。

夕食後は自由行動で、参加者は南塘老街でお土産を買ったり街歩きを楽しんでいた。

4 日目／8 月 2 5 日（日）

14 時 45 分発のフライトのため、9 時にロビーに集合し、空港にバスで向かった。
12 時頃に上海浦東国際空港に到着し、15 時頃関西国際空港に向けて出発した。
18 時頃に関西国際空港に到着し、解散した。

【参加者レポート】（一部抜粋）

■ Ｍさん（大学生）

私がこの 4 日間を通して学んだことは、言語や文化の違いを気にして壁を作るのではなくその人自身を見ることが大切だということです。これまでの学生生活を通して様々な国際交流に参加してきました。しかし、いつも共通言語である英語を通してのコミュニケーションだったので、異文化間コミュニケーションで通じ合うためには英語のレベルを上げないといけないと常に思っていました。そのため今回は言語も文化も違うことでそれが弊害になってしまうのではないかととても不安でした。しかし、そんな不安がどんどんと消えていった時間が、バスでの移動時間でした。バスの移動は 1 日に何度もありました。初めは、目的地から目的地への移動時間だったので、睡眠を取るなど休憩の時間でした。しかし、時間が経つにつれてバスの移動時間はとても大切な日中韓のコミュニケーションの時間に変わっていきました。寧波で様々な場所に連れて行ってもらえる中で日中韓の歴史的な繋がりや中国の歴史を学ぶことはとても興味深いと感じていました。しかし、その一方で参加者との直接的なコミュニケーションはいつ取れば良いのだろうかとモヤモヤした気持ちもありました。それは、私自身がこのプログラムで「一期一会」の言葉の通りに出会う人達を大切にしたかったことと、なぜこのプログラムに参加したのか、日本に対してどのようなイメージを持っているのだろうかなど聞きたいことがたくさんあったからです。たまたま隣になった中韓の参加者の子達と積極的に話し始めると、バスの時間はとても濃いコミュニケーションの時間になりました。特に、お互いのことや国、文化のことをお互いが相手の国の言語で頑張って話したことが心に残っています。お互いにお互いを想い合ってコミュニケーションを取ったこの時間がとてもこのプログラムに参加して良かったなと感じる瞬間でした。今までは、海外の方々と一緒に将来働くことを目標に共通言語である英語を勉強してきました。異文化間でのコミュニケーションに英語は第一優先だと考えていたからです。しかし、今回この 4 日間の派遣を通して、異文化間のコミュニケーションで一番大切なことは相手を想い合って伝えようとする気持ちと行動だと実感しました。連絡先を交換して仲良くなった参加者の子と日本に帰ってきた今でも連絡を取っています。お互いの国にいつ行こうかと計画を立てるのがとても楽しいです。「一期一会」ということばの通りに 1 度の出会いで一生の繋がりになれた日中韓の出会いにシルクロードが繋いでくれた歴史の素晴らしさを感じました。

今回寧波の派遣で訪れた日本と中国との歴史的な繋がりをもっと学び、一緒に学んで過ごした素晴らしい時間と感じた気持ち忘れずに、同じアジアとして日中韓の繋がりにこれからも社会人として携われるようグローバルに活躍していきたいです。

■ Ｏさん（高校生）

私は今回交流会に参加して、中国人や韓国人の方々と交流ができ文化の違いを知ることができ、視野が広がりました。そして、数多くの経験を得ることができました。

まず、私が中国に行く前のイメージです。広大な自然や伝統的な中華料理などの魅力を感じる一方で、テレビなどで日中関係があまり良くないことも報道されていて不安になる面もありました。しかしながら実際に行ってみるとイメージを覆し、中華街で知っている日本語で話しかけてくださる中国人の方や、コンビニで気さくに手を振ってくれる店員さん、お店で買うか悩んでいたら頼まなくても値段を聞いてくれる中国の交流会の参加者の方。国同士は対立していても、周りには温かい中国人の方が多くいることを知りました。そして、中国の歴史的な建造物や伝統的な文化を見て、とても興味深い国だと思いました。

私が印象に残っていることは、ある韓国人の方と交流し仲良くなれたことです。最初のレクリエーションの時に韓国人の方が日本語で話しかけてくれたことがきっかけで、それ以降私も積極的に話しかけることが出来ました。私は英語が苦手ですが、知っている簡単な単語やジェスチャーを使って、韓国アイドルや韓国料理のキムチが好きなことを伝えるととても喜んでくれました。この経験を通じて、言葉がわからなくても伝えようとする気持ちがあれば伝わると感じました。韓国人の方は簡単な日本語の単語を知っていて驚きました。日本語で話しかけてくれると日本人としてはとても嬉しかったので、私も韓国語を学んで今度会えたら使いたいと思いました。

この交流会に参加して感じたことは、積極的に行動することの大切さです。交流会では積極的に行動するだけ自分に返ってくると思いました。なかなかほかの国の人に自分から話しかけることは勇気がいる行動ですが、自分から積極的に話しかけることによって、相手もそれに応えてくれて結果的に多くの人と交流することができました。自分が話しかけてもらうことを待っていては、話せる人が限られてしまいます。勇気は一瞬ですが、後悔はしばらく引きずります。私自身今回参加して、もっと積極的に行動すればよかったと感じる面もありました。次に日本で交流するときはこの反省を生かし、現地の日本人として自分から積極的に話しかけていきたいと思います。そして、奈良の歴史や文化について伝えていきたいです。

日中韓関係はあまりよくないイメージがありましたが、実際中国人や韓国人の方に話しかけてみると、どの国の方も笑顔で答えてくれて、中国人の方が日本に行くのを楽しみにしていることを伝えてくれたり、日本語で話しかけてくれたり、私自身もそれぞれの国の良さを知ることができました。

このような交流会を通じて、未来を担う若い世代が日中韓関係のイメージや先入観を解いていくことによって、これからの国際社会で少しでも日中韓の友好関係がよりよくなればいいと思います。

■ Ｍさん（大学生）

私は 8 月 22 日から 25 日の 4 日間に中国へ渡航した。この 4 日間の中で色々な体験や交流をし、得難い経験となった。ここでは今回中国に渡航した際に、特に印象に残った体験について３つ挙げ、また今後に活かしたいことについてまとめていく。

１つ目の特に印象に残った体験は寧波の歴史について現地で学んだことである。世界史で様々な国の歴史を学んだとしても、実際に現地で見てないため、あまり実感や真実味がなかったが、現地で見ながら説明を受けて実際にそういう時代があったのだと感じた。また、日本側から見た歴史とその国から見た歴史の違いも感じられてよかったと思う。

２つ目は中国の建物についてである。特に印象に残った建物は天一閣である。天一閣では火災を防ぐための工夫について色々学ぶことができた。今回中国に渡航した時に建物や商品を見て一番感じたのが、中国はとても工夫をする国だということである。今回寧波の方からもらったお土産の中でマグネットがあったが袋から出す時にマグネットが落ちないようになのか、マグネットと台紙の裏に磁石がついていた。それも１つでは落ちるようで２つ付いていた。中国の建物について特に印象に残ったのが工夫をしているという点であったが、バスから外の風景を見た際に奈良の平城宮跡や春日大社と同じ様な建物があり、やはり、今奈良にある建物は中国を見習い建てたものなのだと実際に見たことによってシルクロードの流れを感じた。

３つ目は中国、韓国の学生の人たちとの交流である。私は今までこのプログラムではオンラインで中国と韓国の学生の人たちと交流してきた。そのため自分と同じグループの人たちとは満遍なく話すことができるが、１対１で話すことや他のグループの参加者と話す機会があまりなかった。しかし、今回の渡航では自分のグループ以外の参加者と話すことができ、特に韓国の参加者とは１対１で話すことができた。また、直接会って話すことによって意思の疎通が図りやすかった。

こういった体験をしていく中でいくつか反省点があった。例えば、中国の基礎的な知識、お金の種類などについて知らなかったという点や初めて交流する時に自分から話しかけることができなかったという点、中国の参加者とあまり話すことができなかったという点である。そのため、次回どこかの国に行って交流をする場合は今回の反省点を基に渡航の準備をしようと思う。

以上が今回中国に渡航しての感じたことである。全体的に濃い 4 日間であり、良かった点や改善点、自分にどういった所が足りていないかを気付ける時間であったと感じる。今回の渡航を活かして、これからも色々な人と交流し、その国の歴史や文化について学んでいきたい。

活動の成果

成果報告会（国内プログラム）

日時：令和６年１０月１２日（土）　１０：００～１１：３０

場所：奈良市ならまちセンター

講師：中島麦氏（美術家）

出席者：NARA ARTS BRIDGE for Youth　１１人（５人欠席）

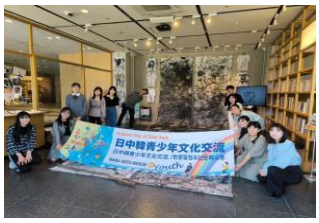
内容：

ならまちセンター１階ギャラリーで、７月から全４回行った国内プログラムワークショップにて作成した作品を展示した。

最初に、奈良市文化振興課長の森光子氏より挨拶があり、次にギャラリーへ移動して、中島氏によるフィードバックを行った。ギャラリーでは、参加者が作品を見ながらそれぞれ感想を話した後、中島氏からもコメントをいただいた。

会議室へ移動し、奈良市交流プログラム【日中韓青少年文化交流 in 奈良】、寧波市青少年交流プログラム、済州特自治道青少年交流プログラムの記録映像を見ながら、参加者がアンケートを記入した。

その後、今年度のプログラムを通じて、新しく発見した「モノ」と「コト」やプログラム全体の感想について、一人ずつ発表を行った。



１０月８日から１３日までの展示期間中、１２８８人の観覧者が来場された。

新しく発見することができた「モノ」と「コト」（参加者のアンケートより抜粋）	プログラムによる具体的な成果（参加者のアンケートより抜粋）
皆で１つのモノを作る楽しさや自分の作品の個性を感じることができた。	文化の違いによって、受け取り方に多少の違いはあるかもしれないが、その距離は学びによって、理解することで、埋めることができると実感した。
人を知ることの楽しさを新しく発見することができた。	自分の殻に閉じこもるのではなく、表現することを通じて、自分を発信し続けることで様々な人と出会い、新たなことに挑戦し続ける自分でありたいと考えた。
言葉が通じなくても友達になることができた。	単なる海外旅行ではなく、実際に国が違う人と長い時間同じ時間を過ごすのは、よりその国の人との距離が近くなり、国に対する理解も深まると感じた。
芸術は上手、下手だけでなく、その人の「自信」や「思い」で成立することに気づくことができた。	その瞬間に見た景色、物、感じたことを思うままに表現する新しい「アート」のかたちに触れ、表現することの可能性を感じた。

令和６年度　今後の課題について

＜成果＞

■　本プログラムは日中韓の文化の力による平和構築をめざした「東アジア文化都市 2016 奈良市」事業を契機として始まったプログラムである。参加者が直接中国や韓国の学生と触れ合うことで、それまで抱いていた先入観や偏見を見直すきっかけとなった様子が見て取ることができた。

■　「アート」は言語を超えて人々を繋げ、共感を生み出す力を持っている。今年度のプログラムにおいて「アート」を活用することで、参加者同士の交流が深まり、お互いの考え方やアイディアを共有することができた。

■　国内プログラム事前ワークショップから中国と韓国の参加者の受け入れに至るまで一連のプログラムは、ストーリー性を感じるものであり、作品展示期間に報告会を実施することで、今までの学びを振り返ることができた。

■　専門的な技術がなくても参加できるようなプログラムであったため、参加者がそれぞれ「アート」を通し、新しい自分や奈良を学ぶことができた。

■　海外渡航プログラムにおいては、寧波市並びに済州特別自治道の多大な協力のもと、安全に行程を終えることができ、参加者にとって満足度の高いものであったことは、レポートからも推察できる。特に現地で同世代の人と親睦を深めることは貴重な機会であることから、本プログラムは大変有意義なものであると考える。

＜課題＞

■　今年度はボランティア参加者が少なく、出席率も低かった。活動への理解と参加を促進するための効果的な方法を検討したい。

■　それぞれのパートナー都市において、このプログラムの位置づけや予算規模に差異が生じている。今後、このプログラムを継続していくにあたり、それらが問題視され、不満が生じないか等、検討していく必要がある。

奈良市文化振興課
奈良市二条大路南一丁目 1-1
☎0742-34-4942　📠0742-34-4728
令和 7 年 3 月